

聖書：マタイ 15：21～28

説教題：小犬でも

日時：2019年9月15日（朝拝）

イエス様は今日の箇所です。ツロとシドンの地方に退かれます。このツロとシドンとは、ガリラヤのさらに北の地方、異邦人の地域です。なぜイエス様はそこへ退かれたのでしょうか。それはそこに住む異邦人に宣教するためではありません。後の 24 節からそのことは分かります。では何のためだったのでしょうか。少しこれまでのところを振り返ると、14 章の最初の部分では領主ヘロデがイエス様の噂を聞いて、あれは自分が殺したヨハネの生き返りだと言っていたことを見ました。イエス様はヘロデがそのように言っていることを聞いて、13 節で寂しいところへ行こうとされました。しかし大勢の群衆が追いかけて来たため、その場所である有名な 5 千人の給食を行われました。そして人々がイエス様に熱狂的になり、王にしようとする中、イエス様は弟子たちを急いで送り出して、ご自分は一人、山で祈りの時を持たれました。そして水の上を歩いて弟子たちと会った後、前回はエルサレムからパリサイ人たちがやって来たという記事を読みました。ついに本部からの正式な調査団がやって来てイエス様に対する挑戦と反抗はいよいよ色濃くなって来たわけです。そんな中、イエス様は一旦、外へ退かれる必要を覚えたのでしょうか。ある期間、静かに休むためです。イエス様は人々の不信仰によって追いやられるかのようにして外へと出て行かれました。

するとどうだったのでしょうか。その地方のカナン人の女が出て来ました。カナン人とは、ヨシュア記の時代の先住民を思い起こさせる表現です。神は積み重ねたカナン人の罪を裁くためにイスラエルをこの地に導きました。その先住民は滅ぼされるべき人々でした。ですからここに出て来た女はイスラエル人でないばかりか、イスラエルの敵であった民族に属する人ということになります。信仰の民イスラエルと全く反対の位置にいる人です。そのカナン人の彼女が「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください！」と言いながら出て来ました。「娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます！」と。「叫び続けた」とあるように、それは激しい求めでした。弟子たちは彼女がこう叫び続けるのを厄介に感じたかもしれません。しかし実にこの言葉こそ、イエス様が聞きたいと思っていた言葉だったのではないのでしょうか。先に見たように、イエス様がこのところ受けて来たのは不信仰という応答でした。直前では宗教指導者たちがイエス様を非難し、否定するためにエルサレムからやって来ました。人間的に言えば、がっかりす

るような状況です。ところがイスラエルの外に退いたところ、ここでまともな信仰告白の言葉がイエス様に向かって述べられたのです。「主よ、ダビデの子よ！」そして何とそう語ったのはこの地方のカナン人の女でした。このアイロニーをまず私たちは感じたいと思います。

ところがここで不思議なのは、その言葉を聞いたイエス様の反応です。それは 23 節にある通り、「一言もお答えにならなかった」ということです。弟子たちはいつまでもこの状況が続くことが耐えられなかったのでしょうか。イエス様のそばに来て、「あの女を去らせてください。後について来て叫んでいます。」と言います。これは彼女の願いに応じてやって、早く帰してあげてくださいという意味でしょう。ところがイエス様はそうされません。その理由をイエス様は 24 節で、こう弟子たちに語ります。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」さらに女がイエス様の目の前まで来てひれ伏して、「主よ、私をお助けください」と願い出た時も、イエス様は言われました。「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」これも意味としては同じです。「子どもたち」は、神の民、イスラエル人を指します。小犬、あるいは犬とは、ユダヤ人が異邦人を「犬」と呼んで見下げていたことを踏まえた言葉です。つまり異邦人にパンを投げてやるのは良くない。子どもたちに与えるのが先だ。イスラエルファーストだ！というわけです。

今日の私たちからすると人種差別も甚だしい発言だと感じるかもしれませんが、これは聖書に一貫して述べられている真理です。イエス様は前に弟子たちを宣教に遣わす際、10 章 5～6 節でこう言われました。「異邦人の道に行ってははいけません。また、サマリア人の町に入ってははいけません。むしろ、イスラエルの家の失われた羊たちのところに行きなさい。」これはイエス様のお考えによることではなく、神のご計画によることでした。創世記 12 章に記されているアブラハムの召命の記事から分かりますように、神は全世界の人々を同時的に、一律に扱うのではなく、まずご自身を信じる信仰の民を起こし、その彼らを通して全世界を祝福しようという計画を持たれました。これは決してイスラエルをえこひいきするということではありません。神の目的はあくまでも全世界です。すべての人々に福音が届けられることです。そのためにまずイスラエルを選び、その彼らとの関係を通して地の果てまで福音をもたらそうとされました。しかしその全世界への福音宣教の時代はまだ来ていません。それはイエス様の復活後のことです。そこでイエス様は地上の生涯の間は、神の計画に従ってご自身の働きをイスラエルに限定

されたのです。そこでここでも異邦人の彼女の願いを退けられたわけです。

ある人は、でも今までも異邦人が祝福を受けたことがあったのではないかと言うかもしれません。確かにそうです。イスラエルの領内にいた人はそうです。しかしイエス様は今、異邦人世界に出ています。その状況で異邦人に祝福をもたらしたのでは、ご自身の言っていることとやっていることが矛盾してしまいます。イエス様は 24 節で「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」と言われました。「遣わされていない」という言葉から分かりますように、イエス様は自分の考えで行動しているわけではありません。父なる神の計画に沿って行動しておられます。

これはカナン人の女にとってショックな言葉だったのでしょうか。このように願い出ているのに拒絶されました。少しかわいそうにも思えて来ます。しかしこうした経過を通して彼女の信仰が明らかにされていきます。イエス様は最後に彼女の信仰を称賛されますが、信仰の一つの特質は最後まで耐え忍ぶことです。一旦拒絶されたからとか、何か妨げがあったからと言って、そこで止まってしまわない。ある種のハードルがあっても、なおお求め続けるところに、なおイエス様ににじり寄るところに、「信仰」というものは明らかにされます。彼女はここでイエス様に向かって叫び続け、またイエス様の前にひれ伏して願い続けました。もちろんただ諦めずに、人間の力で頑張ることが称賛されているわけではありません。彼女をこのように動かしたのは彼女の「信仰」です。「信仰」がこの「実」を結んだのです。その信仰について次に見て行きたいと思います。

その彼女の信仰が良く表されているのは 27 節です。彼女がイエス様の 26 節の言葉を聞いてまず言った言葉は、「主よ、そのとおりです。」というものでした。果たして私たちだったらどうでしょうか。イエス様は直前にこう言われました。「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」こう言われたらカチンと来るかもしれません。人を犬呼ばわりするとは何事か！これは宗教家の言う言葉か！それだったらもう良い！と憤慨して、この場を立ち去るかもしれません。そしてイエス様の悪口を四方に言いふらし回るかもしれません。しかし彼女はイエス様の言葉を聞いて、まず「その通りです」と答えました。これは彼女が自分が本当に神の前では資格がない者であることを認めていたからです。自分は何か権利を主張して神に願い出ることができるとはならない。何かを頂くのが当然であるかのように近づける者ではない。そ

れはおこがましい考えである。そのことは当然わきまえている。ですから彼女は、「その通りです」とまず言ったのです。翻って考えてみると、もし私たちがイエス様のこの言葉を聞いて反発したり、怒ったりするとすれば、それは自分は何かをしてもらって当然だと考えているからではないでしょうか。自分には権利があると思っているからではないでしょうか。自分はそうしていただく資格のある人間だと誤って考えているからではないでしょうか。だから「あわれんでください！」とはとりあえず言うけれども、自分の思う通りにならないと憤慨する。これだけ下手に出て願い出てやったのに、イエス様は受け入れてくれなかった！と言って腹を立てる。しかし彼女はそうではありませんでした。「犬だ」と言われて、「そのとおりです」と言いました。自分は神の前にそのような者だと心から認めていたからです。

これとセットになっている彼女の注目すべき点は、今の言葉の後に「ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」と述べたことです。普通、私たちが自分を資格のない人間だととらえていたら、どうでしょうか。もしかすると私たちは卑屈な人間になるかもしれません。どうせこんな私なんか何かを願ってもダメなんだ。認めてもらえないんだ。そのように嘆き、つぶやき、愚痴をこぼし、あるいは怒り、他の人を妬んだりする。しかしこのカナン人の女は違いました。彼女はイエス様から犬呼ばわりされて、「そのとおりです」と答えました。にもかかわらず、なお求めています。小犬でも食卓から落ちるパンくずは頂きますと。パン屑なんかだったらいらぬ。食卓の上にあるものでなければ御免被る、とは言わない。主人の食卓から落ちたもので良い。それくらいなら、もらっても良いでしょ？とイエス様ににじり寄っています。ここに示されている彼女の信仰とは、自分は資格のない者であるけれども、神のあわれみと恵みは大きいので、このような者もそれにあずからせていただけるという信仰です。まずイスラエル人が先だというのはその通りだが、神の恵みはそこに収まり切らない。そこからこぼれ落ちるほどの恵みがあるはずである。それにはあずからせていただけるのではないか。イスラエルの神は、そのことは許してくださる神ではないか。それを御心とされる神ではないか。

この彼女の告白は、イエス様が出していたサインを見事にキャッチした告白だったと言えるかもしれません。イエス様はここで異邦人の彼女を指すのに「小犬」という言葉を使いました。これは通常の「犬」という言葉とは違います。通りをうろつき周って吠えるたちの悪い「犬」ではなく、家庭で飼われるペットを指す場合に使われる言葉です。

そのイエス様の表現を聞き逃さず、むしろこれを捕まえて、彼女は「小犬なら食卓には着けなくても、その下にこぼれ落ちるパン屑ならいただけるはずでしょう！」と食い下がったのです。ある注解者は、文字にすると 26 節のイエス様の言葉は厳しくも聞こえるが、それを話す言葉のトーンによって、あるいはそれを話されたイエス様の表情によっては、私たちが字を読んで感じる印象とずいぶん違うものがあったかもしれないと言っています。イエス様はこの言葉の中にも、彼女に対する慈しみを込めていたかもしれない。そして女の方では、そこを見事にキャッチした。そしてウィットに富んだやり取りをした。そのようなコミュニケーションがここにあったかもしれません。

イエス様はこの彼女の応答を聞いて、こう言われました。「女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりになるように。」 イエス様にとっても、この彼女の応答は驚きだったのではないのでしょうか。イスラエルの地域にそれが見られず、こんな異邦人の地域のカナン人の女に、見たいと願っていた素晴らしい信仰が見られた。これは 8 章 5～13 節で見た百人隊長の信仰に関する記事と似ています。あの百人隊長も異邦人でした。イエス様はそこで「まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。」と言って驚きの言葉を口にされました。あの百人隊長も自分には資格がないと言っていました。イエス様を私の屋根の下にお入れする資格はありませんと。にもかかわらず、彼は恵みに満ちたイエス様を見つめて、大胆に願い求めました。それで良い！ということです。イエス様はここでもカナン人の女の信仰に出会って、どんなに喜ばれたことでしょうか。人間的に言えば、異邦人世界に追いやられたイエス様をどんなに元気づける出来事だったのでしょうか。そしてその時、彼女の娘はすぐ直ったと記され、この記事は結ばれています。

振り返ってみて私たちの信仰はどうでしょうか。神に願い求める私の信仰はどうでしょうか。今日の記事から学ぶことは、私たちは自分が資格のない者であることを認めて良いということです。自分のみじめさ、小ささ、貧しさを認めて良い。犬と呼ばれるような者であって良い。そのとおりですとって良いのです。私たちはもともと神の前に資格のない者たちでした。何かを主張できるような者たちではありませんでした。神から遠く離れ、望みもなく、神もない者たちでした。そして神の前に汚れていた者たちでした。しかし今日の記事から学ぶことは、そういう自分でありつつも、私たちはいじけず、卑屈にならずに神に求めることが許されているということ。小犬の私は食卓から落ちるパン屑は頂きます！と。今日の箇所のカナン人の女が告白した通り、神の恵みは豊

かで、その祝福はついに異邦人の上にも豊かに注がれるという御心が今や明らかにされました。神の昔からのご計画の通りです。私たちは資格のないような者であるけれども、そんな者でも「おこぼれにはあずかせていただけます。あなたはそのような憐れみに満ち、恵み豊かなお方です。」 そのように告白して、彼女のように日々の祈りにおいて神ににじり寄りたいと思います。そういう人に対して、イエス様は「あなたの信仰は立派です！」と言ってくださいます。その信仰を見てご自身の喜びとしてくださいます。そしてイエス様が備えて下さった神の国の祝福に豊かに生きる者としていただきたいと思います。